

Newsletter

May 2009

http://www.aack.or.jp

目次

| | |
|---------------------------------------|----|
| 藤田和夫氏を偲ぶ―その業績と資料 今西探検隊を支えた多才な探検技術者 | 1 |
| 沖津文雄 | 1 |
| 藤田和夫さんと活構造の研究 | 3 |
| 尾池和夫 | 3 |
| フィールドワークを伝える二つの写真集 | 7 |
| 市川光雄 | 7 |
| チヨゴリザ初登頂五〇周年記念シンポジウム講演抄(下) | 9 |
| チヨゴリザ登頂から五〇年―未知への情熱を育てた京都大学山岳部の土壤 | 9 |
| 平井一正 | 9 |
| 海外からのメッセージ | 11 |
| ニコラス・クリンチ氏からの祝辞 | 11 |
| ワルター・ボナッティ氏のメッセージ | 12 |
| 映画「カラコルム」と「花嫁の峰チヨゴリザ」の一般公開について | 12 |
| 西堀栄三郎先生と私―カカニの丘での記念碑建立を巡って | 13 |
| 神原 達 | 13 |
| 追悼 山口トボトボどこへゆく | 16 |
| 廣瀬幸治 | 16 |
| 図書紹介 | 17 |
| 伊藤一著 | 17 |
| 「われら北極観測隊」 | 17 |
| 「レナ川―白夜航路四〇〇〇キロを行く」 | 17 |
| 「BAMに乗ろう―ロシア的鉄道旅行術」 | 17 |
| 平井一正 | 17 |
| 事務局報告 | 18 |
| 会員動向 | 20 |
| 編集後記 | 20 |

藤田和夫氏を偲ぶ

―その業績と資料

今西探検隊を支えた 多才な探検技術者

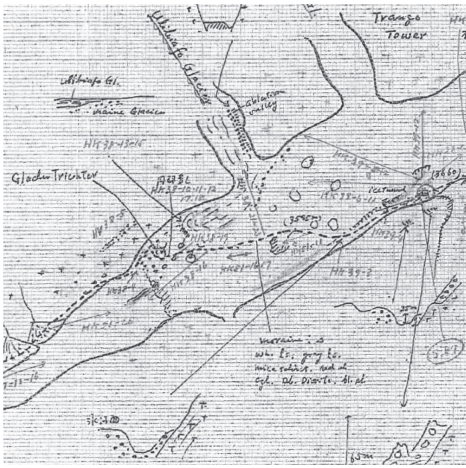
沖津文雄

本会会員藤田和夫氏は二〇〇八年二月一日に死去されました。享年八九歳でした。三高の学生時代から数々の探検活動に従事されたのみならず、専門の地質学においても最先端の業績を積み上げられた藤田氏を失ったことは、当会にとりかけがえない損失です。

藤田氏は芦屋の小学校から大阪の北野高校に入学され、その後、三高から京大理学部地質学鉱物学教室へ進学されました。ロックガーデンなどでのアクロバチックなクライミングが正統的な山登りと思っておられた藤田氏が京都で見出したのは北山のやぶくぐりをする登山スタイルだった。しかし、そのような登山を続けているなかで、三高山岳部の仲間たちなどにも刺激され、藤田氏の探検への興味が芽生えたのであった。藤田氏の回想によれば、そこには今西錦司の影響も大きかったようだ。

三高学生時代に藤田氏は朝鮮の山域を広く巡り、最高峰白頭山に登頂の後、それまであまり知られていなかった地域を下り、第二松花江の源流を確認し、地理学的新発見を行っている。一九四二年には今西錦司を隊長とする探検隊に参加し、地理学的に未知の地域であった大興安嶺を踏査することに成功した。戦後となり、一九五五年にはカラコルム・ヒンズークシ探検隊では地質担当として、一九五六年にはヒンズークシ探検隊の隊長として、この地域を広く探検した。

遠征隊では最低限の準備は欠かすことが出来ない。しかし持参できる装備には限りがある。できれば少しでも装備は少なくしたいであろう。そのような状況のもとで、合理的な準備作業と現地での対応などに、藤田氏の貢献は多大であったらしい。大興安嶺においては、探検隊の出發基地であるハイラルで、器具・食料といった準備をととのえる任務を藤田氏は引き受けた(p.75)。カラコルムでも氷河に覆われた五〇〇〇メートル級の峠を三つも超える大規模なキャラバンの準備も、藤田氏が担当したようだ。また大興安嶺探検で藤田氏は天測技術を駆使し、探検隊の位置を確認した。未知の地域の踏査ではあったが、探検隊が安全で



藤田によるバルト口氷河入り口のルートマップ。
写真番号、撮影位置が記録されている。



80歳のお祝いの席で川喜田二郎氏(左)と

正確に活動できたことは、広く知られている事実である (p.575)。

藤田氏のこのような才能について、直接に知らされたのは、スワート探検隊の一員として松下進隊長に随行してスワート・ヒンズクシを歩いたときであった。カメラなどの隊の調査用具に何か不具合があると、松下先生は、「カラコラムでは、藤田さんが解決してくれた。」と述べられた。現地での対応などにも藤田氏の貢献は多大であったらしい。

藤田氏は地質学を専門としているが、藤田氏が扱った対象はややデビエイトしており、地震である。探検体験と今西錦司の影響が、藤田氏をそのような方向に向かわせたのだろう。

あるお祝いの席で、藤田氏は自分の経歴を振り返る短いスピーチを行った。その主要なテーマは、今でも覚えているが、「全ては北山にはじまる」「北山は大興安嶺につながる」であった。藤田氏はその理由について詳細な説明はしなかった。その説明の内容は藤田氏のニックネームのように「ぐちゃぐちゃ」で、その場ではわたくしにもよくわからなかった。しかし、もう一つ別の発言があったので、それらを繋ぐと解りかけてくる。「大興安嶺では今西さんに聞かれても答えられなかったんや。しかし、今ならはつきり答えることができる、すべては北山にはじまるんや」と続くのである。藤田氏はその生涯にわたり、大興安嶺でなげかけられた今西さんの問いに答えようとしたのであろうか。大げさに聞こえるけれども、この今西さんの問いが、藤田氏の研究の道に大きく影響しているのではな

いだろうか。

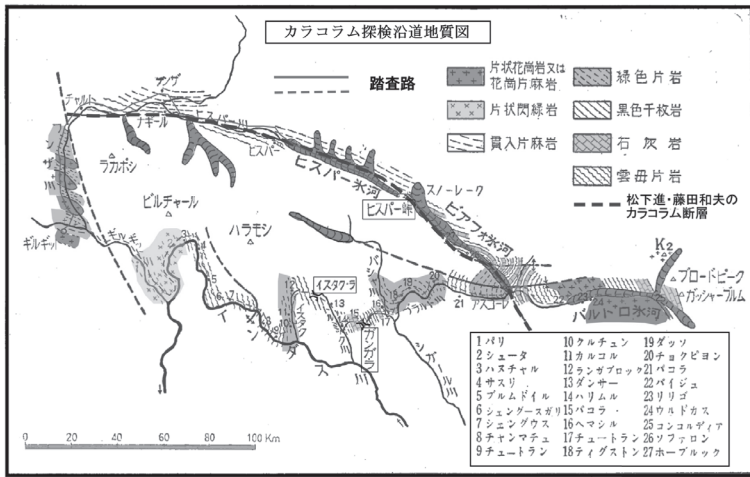
大興安嶺で地質に関連した何があったのだろうか、報告書から振り返ってみよう。

しかし、小半日を走った頃から、平原の中に、もはやうねりとはいえない、風波のような形の小さな丘が、ぼつぼつとすがたをみせはじめ、しだいに密度をましてくる。ちょうど、国境をこえて吹いてくる北風のおこした波のように、この丘どもはみな、急斜面を南に、ゆるやかな斜面を北に向けてならんでいた (p.82)。

このような地形が大興安嶺全域に広がるのである。今西さんは、地質学を専攻しようとする藤田氏に「この地形の成因はなんですか」とたずねたことであろう。藤田氏は返答に窮したのである。今西さんは容赦しない。「地質をやっている、こんなこともわからないのですか？」と問いつめたであろう。

しかしこの席で八〇歳の藤田氏は「今なら自信をもって答えることができる」と胸をはった。

大興安嶺では氷河問題が一つのテーマであった。大興安嶺では一本の氷河も報告されていない。しかし、気温は永久凍土層を保持できるほどの低温であり、降水量も決して少なくない。氷河には深い関心を持っていた今西さんだから、大興安嶺奥地には一〜二本の氷河くらいあってもおかしくない、と期待していたかもしれない (p.581)。大興安嶺には緩傾斜地でも急斜面でも礫原が広く覆ってお



カラコラム探検隊のルートと松下・藤田による地質図と断層の分布

り、礫原を構成する各礫は、その地下では水でパックされており、角のとれていない場合もある (p.275-277)。これは角礫が移動した可能性を示唆している。もし、この角礫が氷と共に動いたのであれば、それは地下水氷河のよなものである。

氷河問題についても、大興安嶺では結論は出なかった。次に藤田氏は今西さんと共にカラコラムにでかけた。カラコラムで体験したことは、乾燥した気候と決して低くない気温である。それなのに、そこにはバルトロやヒ

スパイなどの超巨大氷河がのたうちまわっているのである。その直前にネパール・ヒマラヤを広く経験してきた今西さんにとって、同じヒマラヤとはいえ、ネパールの氷河とカラコラムの氷河との差は納得できなかったであろう。今西さんはここでも藤田氏に問題を与えたことであろう。「どうして、カラコラムの氷河はこんなに大きいのか」と。

このときの藤田氏はもう、大興安嶺を歩いた若い学徒ではない。藤田氏は松下進教授と共同してカラコラム地域を詳細に調査した。ルートマップは藤田氏による調査記録である。この調査の結果、藤田氏と松下氏はこの地域に存在する巨大断層を発見した。氷河は断層の分布に沿って広がっているのである。断層が氷河を作った。それが藤田氏の結論であった。

松下氏と藤田氏はその後もヒマラヤの探検活動を継続し、この断層が延々と分布していることを発見した。その後、国際的な研究者による研究の結果、この断層がアジアブロックとヒマラヤブロックを画する地質学的に非常に重要な構造線であることも明らかにされた。

巨大断層を発見することにより、藤田氏は今西さんの課題を見事に解決した。それ以後は、断層やその結果ひきおこされる地震の研究に傾倒していった。大阪市大退職後は断層研究資料センターを開設し、断層の研究と後進の指導に尽くしたが、その努力は死去される直前までとどまることがなかったのである。

今西さんについて藤田氏はこのように述べ

している。

「大興安嶺に行ってみて今西さんとじかに接してみると、やっぱりものの方が変わってきた。一中略いやはり、今西さんの歴史的なものの方が注入されたということだと思えます (p.581)。」

今西さんの持つリーダーとしての高い資質については多く語られているが、これほど具体的な評価は少ないのではないだろうか。混沌とした世界から問題・課題・テーマなどを的確にすくい出す天才的な才能。今西さんのリーダーとしての資質はそこにあつたのではないだろうか。

今西さんからの課題をすべて解決した藤田さんである、いまは今西さんの近くでしずかに横たわっていることであろう。

本文作成にあたり、朝日文庫「大興安嶺」今西錦司編から多くの箇所を引用しました。()内の数字は引用箇所のページです。「大興安嶺」の編者ならびに解説者に感謝いたします。

藤田氏の残された探検関係の資料は、研究資源アーカイブとして京大総合博物館に収蔵される予定である。

藤田和夫さんと活構造の研究

尾池和夫

藤田和夫さんは、旧制第三高等学校の山岳部員として白頭山への遠征隊に加わった。ま

に関連づけていくプロセスに、ずっと参加させてもらう機会の最初の部分であったと思う。

その間、地震の発生は、岩盤の中で、ずれ破壊面が成長する現象であり、それを起こすストレス場は、固体地球内部の運動、とくにプレートとの相対運動から与えられる非静水場の形成によって作られるという仕組みが明らかになってきた。その地震が生み出した活褶曲や活断層などの活構造を実際に現地で見ると機会を多く得たのが、藤田さんとの議論であった。その議論の場の一つは「TP（テクトノフィジクス）研究会」であった。そこで出会った多くの地球科学者たちとの議論が、地震発生の仕組みを考える私にとってもたいへん魅力的なものであった。

山崎断層の研究を総合的に行うプロジェクトでは、あらゆる場面で地形や地質の見方を藤田さんから教えてもらった。このことはその後、私にとって活断層と地震を考えるための基礎となった。そこでの議論が基になって生まれた断層研究資料センターで一連の行事も忘れられないものであり、私が「変動帯の文化」をとなえる基礎となった。

以上は、日本地震学会の追悼文や、藤田さんが開設した断層研究資料センターの追悼文集に掲載した原稿の引用であり、大部分がその再録である。

藤田さんは、現場を重視し、常に地球の姿を現場で論じることを重んじてきた。それはやはり山登りの体験からくるものであったと思うし、藤田さんの活構造論の基本であったと思う。私もそこから学ぶことが多く、今で

は研究機関の職場の仕事でも、「現場へ行く。自分で行く」「現象を見る。自分で見る」「現在を記録する。自分で書く」という「三現則論」をいうところまで、その影響を受けてきた。

その私の記録から、以下には、藤田さんが主宰した断層研究資料センターを拠点として実施された具体的な事業の事例を紹介してみたいと思う。

一九八七年に断層研究資料センターは発足した。

一九八八年一月、駒公園の前の大阪科学技術センタービルの五階に、断層研究資料センターがあり、理事会とセミナーに出席した。理事会には、理事長の藤田和夫さん、東京都立大学の貝塚爽平さん、東大地震研究所の松田時彦さん、愛知県立大学の岡田篤正さん、大阪市立大学の塩野清治さんと私が出席した。

セミナーでは、岡田篤正さんたちが、北アメリカ、南アメリカ、ニュージーランドなどの活断層のカラー写真をスライドで見せながら、詳しい説明をして充実した学習ができた。センターの会員は、建設業をはじめ断層に関心を持つ人たちで、真剣にノートを取りながら勉強し、セミナーの後のパーティでは、さまざまな仕事をしている人たちと話をした。将来、活断層に地震が発生したときのことを考え、震災を軽減するために何をすればよいかを、みな真剣に考えていることがよくわかった。

一九八九年一二月、断層研究資料センター

のフォーラムでは一三〇人が出席した。私と共同研究をしていた中国西安からの出席者もあった。フォーラムの後、お初天神の「よねむら」で二次会をやった。それも楽しみの一つだった。前田保夫さんがよく食べて飲むのが印象的だった。彼は南方へ調査に行くこと、「おまえほどの島から来たか」と現地の人に聞かれるという経験をいつも披露した。藤田さんは山登りのときの「うまいもの話」を思い出して語った。このとき、二次会の最後に藤田さんの古希を祝って乾杯した。

一九九〇年五月、藤田さんが電話をかけてきて、今年から断層研究資料センターの専任になったという。六月の第四回セミナーでは、私の司会で、まず藤田さんが「私が見てきた世界の大山脈と活断層―そして日本列島―実地撮影のスライドとセンター収集資料を中心に」と題して講演した。四〇年以上にわたる研究の成果を話す藤田さんは、時間がたつほどに乗ってきて約三時間半に及んだ。一〇〇名ほどの聴衆をひきつけていた。

藤田さんを囲んで懇親会も盛り上った。「学問はサロンから生まれる」というのが、いつもの藤田さんの言葉だった。この日の話は、四出井さん団長のカシユガルへの旅だった。「木が一本もないところを、藤田くんは、おもしろがって一人でビデオやら写真をとって、おおよそわきしよって」

四出井さんは森林生態学である。木のない山に興味はない。藤田さんにとって山を見るのに木は邪魔である。

一九九〇年七月、藤田さんに、断層研究資

料センターからフィリピンへ調査団を派遣するよう要請した。中田高さんにも断層研究資料センターの調査団に参加してくれるよう要請した。

八月二二日、断層研究資料センターへ中田さんが来て、写真を見せながら話した。七月一六日の地震の前に、六月二六日から二七日に調査したとき、中田さんが写真を取っていた場所がずれ動いた。地震前後一か月以内に、専門家によって撮影された写真は、おそらく初めてであろう。「調査した露頭が動いたんですよ」と中田さんは興奮していた。

この現場への視察旅行のあと、一九九〇年一二月、建設交流会館で断層研究資料センターのフォーラムがあり、一二〇名ほどの出席者があったが、フィリピン地震の調査団に参加した人たちもほぼ全員参加した。

外国まで見学に行く機会は何回も用意できなかったが、国内ではたびたび野外に出かける会を、断層研究資料センターの事業として用意した。その例を紹介したい。

一九九一年一月、根尾谷断層を見学した。岐阜羽島の駅で東京からの松田さん、嶋本さん、渡邊さんたちと合流し、バスで廻った。根尾断層の掘削調査では、掘るのに約二億円、それを保存する建物に約二億円、資料館をつくるのにさらに約二億円の費用をかけるという話だった。今では、観察館にたくさんの人がある。谷汲で温泉旅館の立花屋に泊まって将来計画について議論した。

一九九二年一月、JR堅田駅に集合して近江バスに乗り、第三回エクスカーションで、

一六六二年の地震の跡を訪ねた。講師は岡田篤正さん、東郷正美さん、植村善博さん。堅田付近の古琵琶湖層の露頭、分離丘や低位段丘面を切る低断層崖、白鬚神社などを見た。さらに花折断層のトレンチ現場を見て、三方

五湖の水月湖畔の虹岳島荘に泊まった。一九九四年一〇月、茨木駅西口に集合してバスに乗り、中国自動車道から水上盆地を通り、丹後へ向かった。水上盆地を通る道は、瀬戸内海側から日本海側へ低い幅の広い谷に沿って走る。この低地は第四紀構造の大きな境界になっている。水上盆地には標高九五メートルの谷中分水界があり、本州がそこで分断されている。さらに北へ向かって、天橋立から湖をへだてた対岸が山田断層である。

そして一九九五年一月一七日、兵庫県南部地震が発生した。一月二三日、藤田さんが朝八時ごろ私の自宅へ電話してきた。地震の前に足を骨折してポートアイランドの病院の一一階にいた。電話の第一声が、「まさか、ここまでひどいとは思わなかったわ」という言葉だった。奥様は壊れた家からはいだしたという。これから大阪のホテルをしばらく点々としながらセンターに出て原稿を書くと言われた。元気な声にほっとした。一月二八日、藤田さんの原稿は朝日新聞の論壇に出た。二〇〇七年一月、断層研究資料センター二〇周年記念講演会が開催された。「大阪直下の上町断層をさぐるーアジアの変動帯の視点からー」が主題であった。藤田さんの話は、大阪市立大学の学生が代読した。

二〇〇八年一月二六日、私は、NHKの

ビルから大阪城と東の活断層地形をみて、いろいろのことを思い出しておいて、朝日新聞大阪本社で科学医療グループの添田孝史記者と話した。藤田さんの思い出をゆつくり語った。藤田さんとフィールドでさまざまの話をして、それが今、私の、人とジオスフェアとの関係を考える基礎となり、日本ジオパーク委員会の活動になり、私が変動帯の文化という概念を持って、天地人を考えることになったという、ほぼ四〇年の歴史を話した。

添田さんの記事は、「(惜別) 大阪市立大名誉教授・地質学者、藤田和夫さん、活断層研究の先駆け」と題して、二〇〇九年一月一六日、朝日新聞夕刊第一二ページに、八三二文字の内容となって掲載された。

その記事は、『活断層研究の先駆者の一人だ。』活断層のずれが積み重なって六甲山は今も高くなっている。神戸に大地震は起こる』と早くから警告していた。』から始まり、『未開拓の分野にチームで取り組む姿勢には、探検の経験がいきっていた。旧制第三高等学校(現京都大) 時代から、国立民族学博物館顧問の梅棹忠夫さん(八八) や今西錦司さん(故人)らと中国・大興安嶺、カラコルム・ヒンドゥークシ山脈などを巡った』とあり、『小学生時代から兵庫県芦屋市で育ち、眼前の六甲山を庭にしてきた。』六甲に発し、六甲に帰る』と震える字で家族に書き残し、六甲山高台の病院で息を引きとった』と結ばれている。

(国際高等研究所所長)

ワールドワークを伝える 二つの写真集

市川光雄

京都大学は「探検大学」と呼ばれるほど海外調査が盛んである。その伝統が山岳部やその前進である旅行部、学士山岳会の先輩たち、とりわけ故今西錦司教授を中心とするグループによってはぐくまれてきたことはよく知られている。第二次大戦後は、こうした伝統がヒマラヤや極地、アジア・アフリカ地域における地球科学、生態学、農学、人類学など、多方面にわたる調査研究へと展開し、それぞれの分野で数々の世界的な業績があげられた。それをもたらししたのは「ワールドワーク、川喜田二郎先生流にいえば「野外科学」であるが、研究室や実験室でおこなわれるものだけが研究とされてきた当初の日本の学界で、ワールドワークは長い間、正当に評価されなかった。しかし先輩たちの偉業のおかげで、いまやワールドワークは、多くの大学や大学院における教育・研究の柱、あるいは目玉とさえなっている。大学教員の公募などでも、「ワールドワークにもとづいて研究をする者」といった文言がみられるようになったし、カリキュラムのなかでワールドワークに言及している大学も少なくない。

ワールドワークは主として自ら集めた一次資料によって研究するものだから、当然ながら長い間これを続けていると、膨大な量の一次資料がたまることになる。実際、学術探

検や調査によって世界各地から収集された一次資料は膨大な量に達しており、とくに、アジア・アフリカの諸地域で撮影された人類学、歴史・考古学、農学、生物学、地球科学などに関する写真資料や映画、ビデオ映像などのなかには、当該分野の研究史において重要な位置を占めるものや、消滅しつつある生物や文化に関する貴重な画像・映像が多数含まれている。これらは教育や研究の貴重な資源として活用できるものであるにもかかわらず、かつして有効に利用されているとは言えない。資料の大部分が個人ごとに所蔵・管理されており、保存・整理の状態が異なるうえ、そもそも誰がどんな資料をもっているのかさえも明らかではなく、資料の有効利用が著しく困難な状態にあつたからである。有効利用どころか、所蔵者の高齢化や資料自体の劣化によって、こうした第一級の資料が散逸・消滅の危機に瀕しているのである。とくに、最近になって、アジアやアフリカの各地で四〇年に及ぶ調査をしてきた者が、ぞくぞくと定年退職を迎え、また今後一〇年のあいだに、これまで各方面・地域で調査の中核を担ってきた多くのワールドワーカーが定年を迎えようとしていることから、資料の散逸・消滅の危機が現実化している。これらの貴重な資料をデジタル化し、原資料とともに適切な形で保存するとともに、それらを教育・研究・広報・社会還元のリソースとして幅広く活用することができないものか。

このような問題意識にもとづいて、本学のアフリカ関係の有志の間では、これまでの海

外調査などによって蓄積された膨大な映像や画像等の資料を収集・整理し、それを教育・研究のための資源として活用するための組織として、「映像アーカイブセンター（仮称）」を設立する構想が練られてきた。そして、平成一七年三月に、当時日本アフリカ学会の理事を務めていた有志が中心になってこの構想の具体化に向けて動き出すことになった。ま

ず四月に、「京都大学ワールド映像アーカイブセンター」（仮称）の設立に向けた趣意書を持参して、当時の尾池和夫総長に面会をもとめた。趣意書は、この計画の発案者でもあつた理学部名誉教授の西田利貞氏が起草し、石田英実理学部名誉教授（「自然人類学」と故福井勝義人間・環境学研究科教授（文化人類学）、山極寿一理学部教授（霊長類学）、そして当時、アジア・アフリカ地域研究科長をしていた私が共同提案者となつた。

このとき総長室にはたしか、当時の金田企画担当理事と事務局の松本企画課長、そしてメディア情報センターの美濃教授が同席していた。つまり総長は、我々の訪問に対して、関係する理事、教員、そして事務方を交えて対応してくれたわけで、総長自身がこの計画に相当の関心をもっていることが窺われた。ただし総長は、計画着手のための財政的支援を求めようとしていた我々の機先を制するよう

に、まずは民間などから外部資金を獲得してはどうかと提案されたのであるが。

まずは外部資金で、という総長の提案があつたものの、すぐに外部資金のあてがあるわけではなかつたので、とりあえずは平成

一七年度の総長裁量経費を申請してみることに
なった。そして幸いにも総長の理解を得て、
平成一七年度からさっそくこの計画のために
総長裁量経費が措置されることになった。こ
うして、フィールドワーク映像アーカイブ設
立のための準備作業がスタートすることにな
ったのである。

初年度の事業は、福井教授を代表者とし、
大学院人間・環境学研究科が幹事部局となっ
て、各人が所蔵する映像・画像資料に関する
アンケート調査や、シンポジウム「映像が語
るフロンティア精神―京都大学フィールド
ワークの80年―」と、同名の写真展を開催し
た。また、京都大学におけるフィールドワー
クの歴史と展開を紹介するDVD「未踏の地
平―京都大学のフィールドワーク八十年」の
作成をおこなった。このDVDはいわば試作
品で、収録されている映像もオリジナルなも
のばかりではなかったが、このあとの「京都
大学のアフリカ研究五〇年」などの同様な作
品を製作するうえでいぶん参考になった。
またシンポジウムでは、尾池総長のあいさつ
の後、探検部OBの本多勝一氏と、阪本寧男
(栽培植物学)、西田利貞(霊長類学)の両名
誉教授による基調講演、そして若手研究者を
交えての総合討論があった。大先輩である吉
良龍夫先生や藤田和夫先生、梅棹忠夫先生、
そして戦後のAACKによるヒマラヤ遠征を
担ってきた平井一正氏、酒井敏明氏などの諸
先輩が参加するなど、シンポジウムは大変な
盛り上がりを見せた。

平成一八年度は、やはり人間・環境学研究

科を窓口にして、京都大学におけるフィール
ドワークの草分けの一人である藤田和夫先生
(地質学)の画像資料の整理と、写真資料集
『フィールド映像アーカイブ vol.1』として「京
都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊
1955(1956)」、及び小冊子『フィールドワー
クものがたり no.1..動きつづける大陸―藤
田和夫のカラコラム・ヒンズークシ探検』を
出版した。前者は一九五五年の京都大学カラ
コラム・ヒンズークシ学術探検隊カラコラム
班および一九五六年の日本・パキスタン合同
学生探検隊ヒンズークシ探検隊の際に藤田先
生が撮影された写真から二百数十枚を選んで
編んだ写真集であり、後者は旅行記というか
たちをとりながら、青少年向きに探検のおも
しろさと地質学的な発見について伝えたもの
である。これらのなかには、最新のプレート
テクトニクス論でヒマラヤ・ブロックとア
ジア・ブロックの接点とされている断層を示
す写真など、貴重な資料が多数含まれている。
藤田先生の資料は、六×六版で撮影された写
真の質もさることながら、きわめてよく整理
されていた。写真には手書きの詳細な日付入
りのルートマップが添付され、その中のどの
地点からどの方向にむけて撮影したものかが
克明に記載されていた。まさに、フィールド
ワーカーのお手本のような貴重な記録である。

なお、藤田先生の資料の整理には、大サハ
ラ学術探検隊長だった故山下孝介教授のお
孫さんにあたる山下俊介君が協力してくれ
た。山下君はもともと文学研究科で西洋史(イ
タリア史)を専攻していたとのことであるが、

画像・映像方面にも詳しく、仲間とともに藤
田先生の写真集および冊子の編集に献身的に
あたってくれた。

「映像アーカイブ事業」の三年目にあたる
平成一九年度には福井教授が定年退職された
ので、アフリカ地域研究資料センターが幹事
部局を引き受け、この事業を継続することにな
った。とくに、この年が六〇周年にあたる
本学の霊長類学研究、五〇周年の節目を迎え
るアフリカ研究などの海外調査関係の画像・
映像資料のアーカイブ化を中心に作業をすす
めた。具体的には、本学における霊長類研究
及びアフリカ研究の創始者の一人であり、今
西先生の跡を継いでそれらを大きく発展させ
た故伊谷純一郎教授の所蔵写真資料を中心
に、アフリカ研究、霊長類研究の歴史と展開
を伝える二万点あまりの画像資料のデジタル
化と整理、そしてその中から、三八〇点ほど
を選んで「フィールド映像アーカイブ no.2」
として、写真集「人と自然への共感―伊谷純
一郎のフィールドワーク」の出版をおこなっ
た。またこれも尾池総長の肝いりで、平成
二〇年秋に川端通りに新築された稲盛財団の
寄付建物(稲盛記念館)内に映像資料のため
のアーカイブセンターが設けられることにな
り、そこで披露される映像作品「京都大学の
アフリカ研究五〇年」の作成と画像資料の展
示に向けた作業を並行してすすめた。

周知のように、伊谷先生は今西先生の薫陶
を受け、戦後いち早く野生ニホンザルの社会
及び文化の研究に着手した。先生がすすめ
た、ニホンザルの個体間における順位存在

や、それに基づく社会構造の解明、音声コミュニケーション・カルチュア等のいわゆるインフラヒューマン・カルチュアに関する研究は、当時、ヒト以外の動物にはみられないと考えられていた「文化」や「社会」が人間以外の動物に存在することを鮮やかに描き出した研究として大変な評判になった。それらは、いちちやく海外の研究者の注目するところとなり、まもなく我が国は、霊長類学や人類進化論の分野で文字通り世界を先導する立場に立つことになった。また、こうした成果をもとに、アフリカで大型類人猿の調査が着手され、ヒト化の鍵を握るチンパンジーやゴリラ、ボノボの社会や文化的行動が次々に明らかにされていった。さらに、その過程で、アフリカの人々とその文化に強い感銘と共感を覚えた伊谷先生のリーダーシップのもとで、人類学、農学、生態学等を中心とする本学のアフリカ地域研究が大きく展開していった。この写真集には、初期のニホンザル研究から類人猿研究を経て、アフリカ社会・文化の研究に至る、先

生の研究活動の軌跡が示されている。それは同時に、京都大学あるいは日本における霊長類学、人類学、アフリカ地域研究の歴史と展開を語る貴重な記録となっている。

伊谷先生の写真集の出版は、ご子息の伊谷樹一氏のほか多くの方の努力のたまものであるが、伊谷先生の癖のある字を「解読」してくれた須羽宏子さんと、編集の実務にあたってくれた上述の山下俊介君のご尽力にたいしては特に感謝しておきたい。

なお、本プロジェクトで進めてきた「映像アーカイブ事業」は、平成二〇年度から総合博物館に設置された「研究資源アーカイブ・センター」において継承、発展が図られることになった。藤田先生、伊谷先生の写真集も、ここで電子版の形でみられるようになるはずである。このセンターが核となつて、今後もひきつづき、フィールドワークの貴重な記録と資料の保存にむけた作業がつけられることを願いたい。

山岳部の果たしてきた役割は大きい。事実日本の登山探検をリードしてきたと言ってもいい。二〇〇八年はチヨゴリザ初登頂五〇周年にあたり、この際、未知の領域を開拓してきた京都大学山岳部の土壤はどういうものであったかをふりかえる。

に、京都大学の登山探検の流れと、山岳部の位置関係について説明する。一般に京都大学の登山探検の原点は、今西、桑原、西堀などがその基礎を作った三高山岳部にあるとして認められている。しかしその流れが、現在の山岳部に至る経過は、決してスムーズに移行したものではない。(平井・京都大山岳部前史、ニューズレター、No.8, 1998)

今西たちが京大に入学したころ、京大には山岳部というものがなかった。あつたのは旅行部で、そのなかに山岳班、スキー班、遠足班という三つの班があつたが、その山岳班はかなりレベルの低いものだった。今西は山岳班を立て直し、ヒマラヤの研究を進めた。そしてその結果、ヒマラヤ遠征のための組織として京大士山岳会(AACK)を創設した。一九三二年のことである。

AACKは一九三四年の冬季白頭山の初登頂のあと、カブル、K2などを計画したが、いずれも日中戦争のために実現はならなかった。ヒマラヤへの夢を捨てきれない今西らは、京都探検地理学会を作り、樺太、ポナペ島、さらに一九三七年の大興安嶺探検など、未知への領域の探検を行った。

一方旅行部も中部大興安嶺探検や富士山での地対空連絡の訓練を行ったが、戦火がきびしくなり、軍からの解散命令を受け、活動を中止したまま戦後を迎える。そして以後再建されることはなかった。

戦後の混乱期を経て、一九四七年に藤平正夫や伊藤洋平らが中心となって、新しく山岳部が作られた。これが現在も続いている京大

チヨゴリザ初登頂五〇周年記念 シンポジウム講演抄(下)

チヨゴリザ登頂から五〇年―未知への 情熱を育てた京都大学山岳部の土壤

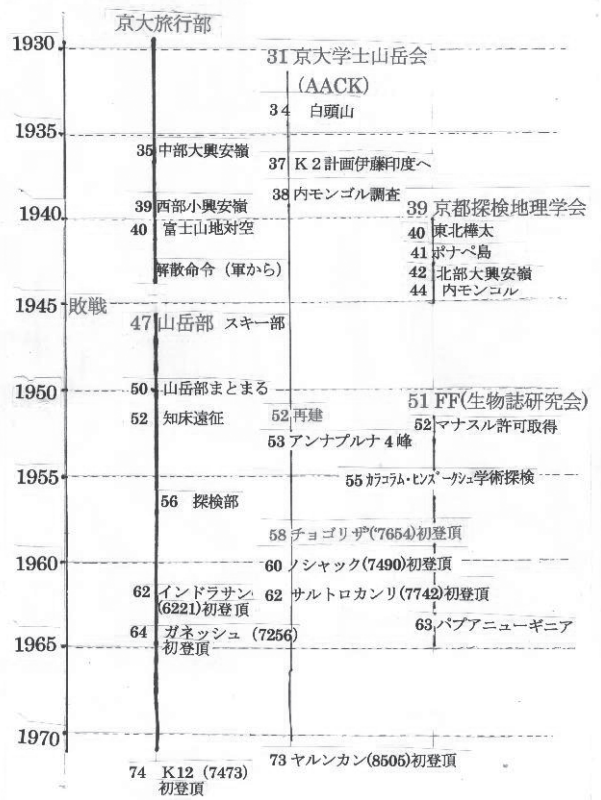
平井正一

我が国の登山探検に京都大学学士山岳会

一、京都大学の登山探検の流れと山岳部(図一)

京大山岳部の土壤について説明するまえ

京大の登山探検の流れ



山岳部の原点である。旅行部の流れを汲むものではあるが、連続しているわけではない。

戦後探検地理学会は解散した。それかわるものとして今西らは一九五一年に京大生物誌研究会(F F)を作った。(AACKが再建されるのは一九五二年である)。そしてF Fはマンサルの許可をとるのであるが、京都大だけでは手に負えないと判断した今西らは、それを日本山岳会に移譲する。これで取まらないAACKの若手のつきあがりもあり、一九五三年にAACK初めてのヒマラヤ遠征隊が派遣されるのであるが、残念ながら登頂はならなかった。

このように戦前は軍部の支配をよそに蒙古や興安嶺など大陸へ、未知に領域を求めた。

したといえよう。一九五〇年七月の剣岳真砂沢の合宿は、京大山岳部としてはじめてまとまった活動であった。

この合宿をステップボードにして、以後ひとつにまとまった山岳部が確実に力をつけていった。一九五二年冬の知床遠征は、京大山岳部の実力を岳界に認めさせ、ヒマラヤへの大きなステップになった。そして一九五八年のチョゴリザはまさに新しく発足した山岳部で育てられた力が存分に発揮された結果であった。以後ノシャック、サルトロカンリとヒマラヤ初登頂は続く。

三、山岳部の土壌は如何に作られたか

山岳部は、登山探検の分野のみならず、多

しかしどうしても水平的であり、垂直の部分での未知への挑戦は、戦後を待たなければならなかった。

二、山岳部の発展

一九五〇年四月は、山岳部の希望の幕開けの年である。

私はこの年に入学した。前年の新制一期は九月入学という変則的なもので、この年からはじめて一体化した山岳部が発足

くの研究、学問分野、さらに実業界などの分野において多くの人材を育ててきた。

山岳部という世界で青春時代を過ごしたことの影響ははかり知れない。同じ世代の若者だけでなく、OB、上級生、下級生などとのつぼの中で、知らず知らずの内に植え付けられた未知の世界へのあこがれは、終生根を生やし、抜きがたいものになる。当時多感な若者は、その中で何を考えて育ったか振り返ってみる。

(一) 目的意識の確立—行動目標

山岳部には様々な標語があった。ヒマラヤなど話題にもならなかったとき、実力をつけよと言う意味で「step by step」が、そしてやがて未知への憧れが「パイオニアワーク」と変わり、そのためには「completeにしてall roundな登山」が必要といわれた。そしてこれらの標語が山行計画を作るときに、一つの行動規範になった。

そして目的とする標語が次々と実践され、実現されるとき、それは自信につながり、さらに新しい目標がたてられる。

一九六二年のインドラサンにはじまる山岳部による学生主体のヒマラヤ遠征の成功は、まさにこれらの標語の集大成として具現化したものであり、山岳部に大きな刺激となり、発展につながっていった。

これらの標語は、登山だけでなく、研究面や仕事の面でも大いに活かされていることを付記したい。

(二) 多種多様な広がりをもつ集団の強み

新制と旧制、上級生と下級生、理系と文系、

多種多様な個がお互いの接触によつて触発され、新しい発想が生まれる。それは装備や食料の開拓をはじめ、多くの話題をめぐつての議論も生まれる。なぜ山に行くのか、パイオニアワークのあり方など、が議論され、その過程の中で夢が育つていった。

(三) 多分野で活躍する先輩の刺激

今西など先輩たちの登山探検報告などを読み、彼らが身近に感じるだけに、刺激を受け、憧れが芽生える。先輩に大学院生が多いというところは、山行きを共にしたり、話がきけるということとで大きな利点であった。人材が輩出する要因である。

登山探検の報告書が後輩にあたえた影響のひとつに、今西編の「大興安嶺探検」毎日新聞社五二年―朝日文庫から復活版がある。この本は、未知への探検のすばらしさをロマンあふれる文章で書かれており、バイブルの本であった。この本を読んで未知の領域の探検に大きな憧れをもつた者は多い。

先輩の約三分の一が博士であるということも、登山と勉強の両立を無言で教えられた。

(四) 先輩の情熱を育てる先輩たち

若者がヒマラヤを計画するとき、相談にのり、支持する先輩が多いことも、京大山岳部の恵まれてることである。先輩に人材は多く、学界、政財界問わず必ず人脈をたどれる。まさに地下茎のように人脈があり、これは大きな強みであった。このように先輩を支持する先輩なしには未知への情熱は育たない。

計画ができて、隊長がいなくては関係機

関への交渉や募金に困る。幸い多くの先輩が大学や研究機関に在職しており、隊長を引き受けてもらえ、また募金に協力してもらえた。

(五) 京都の土壌

京都にはもともと官に対抗する自由な空気があった。三高山岳部が上級生でも呼び捨てにしてよんでいたというのも、その表れであろう。その空気は京大山岳部でも続いていて、呼び捨てはしないものの、上級生との垣根が低く、自由な雰囲気があった。

また京都は地理的に狭く、学生が下宿しているのは大学近辺が多い。そのためお互い自転車や徒歩で集まれるので、終電を気にすることなく、いろいろな計画が進められる。

(六) 達成感の充実から新たな目標へ

山岳部の相次ぐヒマラヤ初登頂は、若者に達成感を与え、さらなる目標に向かってすすむ原動力になった。

四、おわりに

初登頂する山が少なくなった現在、登山のみならず、専門知識をいかして自然を相手に未知に挑む方向に変化しつつある。そしてそれは京大山岳部出身者の格好の舞台でもある。

宮木のように企業に就職しても、パイオニアワークの実現のために情熱をそそいだ者もいる。宮木は北極圏で遭難死するのであるが(ニュースレター、No.44, 45, 08)、未知への探求は、水平、垂直いづれにしても危険が伴う。それをのりこえてさらに前進する精神が山岳部にはあった。

しかし現在は若者の考え方も変化し、社会情勢も変化した。光輝く時代を過ぎた者は、何かそれに代わるものを後世に残す義務がある。本シンポジウムが一つの示唆を与えれば幸いである。

海外からのメッセージ

ニコラス・クリンチ氏からの祝辞

一九五八年の日本のチヨゴリザ遠征隊がある素晴らしい登山の五〇周年祝賀会を開催するに当たり私に挨拶を送る機会を与えられたことは、私にとつて大きな名誉であります。

この五〇年のあいだには多くのことが変わりました。通信手段、輸送方法、技術が変わりました。ある意味では、世の中の山にたいする興奮すら変化してしまいました。時間という霧の中に包まれて、あなたがたの遠征およびそれが目指したものの理解は変わっています。しかし、変化しなかったものはあり、それはあなたがたが現実になし遂げられたことであり、当時カラコルムにいた私たちが十分に記憶しているところでもあります。

なにひとつ容易にできたことはありません。隊を組織することは困難でした。許可を取得することは困難でした。資金を手当てすることは困難でした。適切な装備類を準備することは困難でした。輸送は困難でした。とりわけ、エヴェレストよりも長い距離を、山の麓まで二週間徒歩行進を続けて接近しました。やつとこのことでチヨゴリザの基部に到着

してみると、その山は頭上高くに現れました。あらゆる苦難にかかわらず、技術と、勇気と、チームワークとをもって、あなたがたはひどい天候をもふくむすべての障碍をのりこえて、成功を勝ち取られました。あなたがたにとり、日本人登山者にとって、世界中の登山者にとって、めざましい成功でした。あなたがたは、どれほど幸運であったから成功を遂げることができたのかということに気づかされていたとはいえ、また同時に、十分な準備とはげしい勇気ある努力があつて初めて幸運をひきよせることができたのだと、あなたがたはご存知でした。

しかし、あなたがたが達成したものは登頂以上のことでした。将来の世代の登山者たちにとつての一つの輝かしい実例を示しただけではありません。あなたがたが得た最高の褒美は、お互い同士の、また、あなたがたを知る他の人たちとの固い友情であります。さらに言えば、山は重要であります、人びともっと重要なのです。

このたびの祝賀会において、あなたがたの見事に達成した成果の回想を楽しみ、他から受けた賞賛を正しく評価してください。そしてなによりも、隊員たちとの、また、仲間の登山者たちとの友情を充分に味わってください。

そうして、あなたがたの感動的な登山の五〇周年記念会に対する、ヒドンピーク遠征隊員たちからの、またすべてのアメリカ人登山者たちからの祝意をお伝えします。

(平井経由、酒井敏明訳)



ボナッテイとポDESTaさん

ワルター・ボナッテイ氏のメッセージ

チヨゴリザ隊が、八月四日に、藤平さん、平井さんの登頂によって栄冠を獲得し、その後八月六日にわたしどもガツシャブルムIV峰が、マウリとわたしの登頂によってその目的を達成したのは、いまを去る一九五八年のこと。カラコラム登山史上でのこの二つの偉業は、ある意味で日本とイタリアとの姉妹関係を画した出来事とも言え、日本隊の隊員に目にかかれたときの、あの栄光ある日々は、いまもおわたしの心に生き生きとした記憶として残っております。

さて、このたび、高い実力をもった京都大学学士山岳会によるチヨゴリザ登頂が五〇周年をむかえ、皆さんがそれを祝うということ知らされ、わたしは改めて、登頂を終えた私たちガツシャブルム隊がベースキャンプをたずねたとき、あのすぐれた桑原教授に率いられた隊員の皆さんから、ご親切なもてなしを受けたあのときの、あの好意にあふれた、

すばらしい日のことを想い出しています。そして、わたしが妻ロッサーナとともに京都を訪れたとき、この隊員のうちの多くのメンバーにお会いできたのですが、それはわたしにとつて、この上もない喜びであったことも付記します。

そして、これらのことを想起しつつ、この機会に、固い友情の絆をあらためて皆さんと確かめ合いたく。

(谷経由、谷泰訳)

映画「カラコラム」と「花嫁の峰チヨゴリザ」の一般公開について

一九五五年、京都大学は木原均教授を隊長とする「京都大学カラコラム・ヒンズークシ學術探検隊」を派遣し、パキスタン、アフガニスタン、イランなど広範囲に學術調査を行った。そのとき同行した日映新社、中村、林田カメラマンによる映画が「カラコラム」である。特に今西錦司を支隊長とするカラコラム支隊は、日本人としてはじめてK2はじめ多くのジャイアンツを紹介し、強い印象を与えた。

それから三年後、今西らのカラコラムに刺激を受けて、一九五八年、京都大学学士山岳会は、桑原武夫を隊長とする登山隊をカラコラムのチヨゴリザ(七六五四m)に派遣した。先年のアンナプルナIV峰登山の不成功のためにも、今度こそ成功しなければという期待にこたえて、隊は初登頂に成功する。そのとき日映新社から派遣された潮田カメラマン撮影による映画は「花嫁の峰チヨゴリザ」とし

て一九五九年、一般公開された。「カラコルム」と同様文部省特選になり、多くの市民はじめ中・高生が鑑賞した。映画は前年に遭難したヘルマン・ブールのテント発見のシーンや、五〇〇ミリ望遠レンズで登頂の一部始終をカメラが追いかける迫力、また画面に流れる芥川也寸志の音楽が特に印象に残る。

このほどこの二つの映画の放映権を京都大学が買い取り、昨年に創設された、京都大学研究資源アーカイブの映像ステーションで一般公開されていることを紹介する。

二〇人ほど入れる部屋で、大きな画面で見られる。上映時間は「カラコラム」が一〇・一五、二三・一〇、「チョゴリザ」が一四・四五、一四・三五（毎日上映、入館無料）である。

映像ステーションは、新設の京都大学稲森財団記念館にある。なおこの記念館内には他に京都賞受賞者を紹介する部屋や、今西錦司らによるアフリカ研究、東南アジア研究、考古学研究の成果をはじめ、西田幾太郎、湯川秀樹さんたちの足跡を辿るビデオなどがあり、それぞれ一〇分程度を選んで見ることができる個人閲覧用のブースもある。

開館時間は一〇・〇〇～一六・〇〇、休館日は日、月、祝日、京大創立記念日（六月一八日）と年末年始、場所は川端通り荒神橋東詰めで、京阪電車「神宮丸太町駅」五番出口北へ徒歩五分、または市バス河原町通「荒神口」下車東へ徒歩五分。問い合わせは京都市左京区吉田京都大学稲森財団記念館（電話〇七五―七五三―七七四一）へ。ぜひご覧ください。

ださい。

編集者より

このたびのチョゴリザ初登頂五〇周年記念シンポジウムでは、本誌前号（四八号）と今号に掲載した講演のほかに、藤田耕史氏の「気候変化とヒマラヤの氷河」及び松沢哲郎氏の「アフリカの森とチンパンジー研究の未来」と題して興味ある、又意義深い講演がある。

西堀栄三郎先生と私

―カカニの丘での記念碑建立を巡って

神原 達

二〇〇六年の二月二日、私はネパール、カトマンズ市の北西にあるカカニの丘の近くでマナスル、ヒマルチュリ、ピーク二九のいわゆるマナスル三山が遠望できる所に立っていた。一九五二年に、ネパール開国後日本人として初めて同国を訪問しマナスルの登山許可取得に尽力された故西堀栄三郎先生の記念碑が建立され、その除幕の式典が行われ、先生にはこの場所から永遠にヒマラヤの山々を見ていただくことになったのだ。この記念碑を建てられたのは西堀先生のご遺族で、ご長男の西堀岳夫氏、ご三男の西堀峯夫氏そしてご息女、暁子様とそのご夫君の稲葉瑞穂氏であった。式典には当時日本山岳会の会長をされていた平山善吉氏など日本とネパールの関係者四〇名ほどが参列した。西堀先生が家族

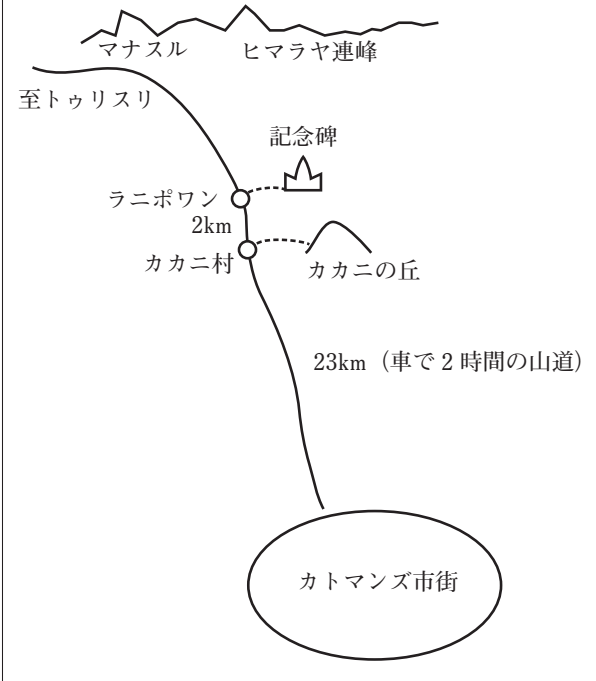
りました。これらをふくむシンポジウムの内容は、京都大学学術出版会より「映像と記録 フィールド学のパイオニアたち（仮題）」として出版される予定です。詳しくは次号以下でお知らせします。

またこのシンポジウムについてのアンケートにはJACおよび稲門山岳会の成川隆顕氏よりご丁寧なご返事をいただきました。

的に親しくされていた故クリシュナ・バルマ氏ご家族（一人のご令嬢のご家族）も参列し、そして何よりもこの記念碑の建立に際し西堀家の依頼を受けて実務的なこと全てを取り仕切ったヒマラヤ観光開発（株）社長の宮原魏氏の姿があった。ご遺族を代表して西堀岳夫氏が挨拶され、そののち平山会長の祝辞があり、日本ネパール協会の副会長をしていた私も先生のご功績などを皆様にお話した。私がかつて西堀先生の追悼文をヒマラヤン・クラブのHimalayan Journal (Vol.46, 1988-89) に書かせていただいたことがあるので、先生のご経歴など存じあげていたのだ。

カカニの丘の西堀先生の記念碑については、日本山岳会会報の「山」の七四八号（二〇〇七年九月）に宮原氏が「西堀栄三郎さんを偲ぶ、カカニの丘の記念碑」と題し詳細をお書きになっているので、既にご承知の方も多いと思う。だが私はここで、記念碑建立をご存じない方のために多少自分のことがまじるが一文を纏めさせていただく。

西堀栄三郎先生記念碑（カカニ）への行程図



カカニの丘はカトマンズ市の北西に二三km、車で二時間ほどの標高二〇七三mの所にあり、西からアンナプルナ連峰、東にゴウリサンカールに連なり、眼前にはガネッシュ・ヒマールが見えるヒマラヤ展望地であり、日本の初期の登山隊がここから初めてマナスルが遠望できると憧れた地である。小高い丘は野芝で覆われ、その最高所にはネパールが鎖国をしていた時代に英国の政治駐在官 (Resident) が建てた小さいバンガローがあったのだが、それは現在では朽ちはたてていて、この土地はネパール政府の管理地になっている。カトマンズの東部の丘陵地、ナガルコットがヒマラヤ展望地として開けた現在、カカニを訪れる観光客はそれほど多くなかった。なお、カカ

ニ村では日本の農業指導者が日本から持参した大根、苜を栽培し、それが特産品となり、カトマンズの市場に出荷されている。

西堀先生の記念碑はカカニの丘の最高所ではなく、カカニ村からさらに二キロほど先にあるラニボワンという小さな部落の畑の近くの丘状になった所にある。この土地を西堀先生はご生前にクリシュナ・バルマ氏の名義で購入され、そこに小さな家を建て「ボリヴィラ」と名付け、ネパールに行かれる度にそこを訪ねて

いられた。先生のご生誕一〇〇年を記念してここを小公園として記念碑を建てることを西堀家では宮原氏に相談された。宮原氏はそれを受け、そのための整地作業、石碑の作製と輸送、現地での建設そして除幕の記念式典の取り仕切りなど全てを実施された。諸般の事情で、記念碑の除幕は二年遅れ、日本山岳会によるマナスル初登頂五〇年と日本・ネパールの国交樹立五〇周年を祝う二〇〇六年に合されたのだ。なお、そのための経費は全て西堀家が負担された。

世界最高所のホテル、「ホテル・エヴェレスト・ビュー」を建てられた宮原氏にとつてこの程度の工事を請け負うのはそれほど困難な仕事ではなかったかもしれないが、台座の

石が七トン、碑の彫られた石が三トンという大きな石をゴダワリの石切り場からパタン市の工業団地の中にある石屋まで運ばせ、石碑の両面にある英文文面（別掲）は西堀家の作に従いそれを石屋に彫らせたのだ。さらにその現地までの輸送は、パタンからカカニまでの山道を大型トラック二台で、また村から丘の上まではクレーンは使わずに大勢の人力を使い人力で運び揚げた。石碑のまわりには囲みのロープを吊るす小石柱を一二本四方に立て、正面には石段が作られてある。私も宮原氏に誘われパタンの石屋に行き制作中の石碑を見に行つたことがあるが、そのときの宮原氏のネパール人業者との応対ぶりは、さすがだと感心したものだ。

秋咲きのヒマラヤ桜の苗木も石碑の周囲に植えられた。小公園に隣接する丘の麓ではヒマラヤ桜は満開であった。記念式典はヒマラヤから吹き寄せる風が冷たかったものの、私にとつては多くの旧知に再会する楽しい場でもあった。ネパール山岳協会 (NMA) の役員やシェルパたちも大勢いた。クリシュナ氏の二女であるアムリタさんは私のネパール生まれの娘の友達で、独身のとき日本にきて天理大学に通っていたのだが、西堀先生のご要請で東京にて何日かお世話したことがあった。アムリタさんは帰国後ネパール人の医師、パルマー氏と結婚し、男児二人を得て幸福な家庭生活を営んでいられる。アムリタさんと久しぶりにカカニにて再会したとき、軽井沢の別荘でネパール式の紅茶の入れ方を娘に教えてくれたことなどをなつかしく思い出した。

This monument is dedicated to the memory of Dr. Andrew Eizaburo Etesan Nishibori (1903-1989), who loved nature while having an inquiring mind into the unknown throughout his life.

Being a scientist and engineer he was the first Japanese to visit Nepal soon after the country was opened to foreigners. Further, he paved the way for the Japanese alpine party to achieve the first ascent of Manaslu (8,163m) on 9th May, 1956. With his love for Nepal, he contributed to the promotion of Gorkha Dakshin Bahu II by the late King Birendra Bir Bikram Shah Dev the Government of Nepal.

In the Year 2006 celebrating the fiftieth anniversary of the successful ascent of Manaslu and the fiftieth anniversary of the establishment of the diplomatic relations between Nepal and Japan.

The Nishibori Family



2006年12月、除幕式での西堀家御一行
(左から、西堀岳夫氏、稲葉瑞穂氏夫妻、西堀峯夫氏)

西堀先生は日本の多くの登山家、探検家を指導され、日本の登山・探検界をリードされた。その最大のもは日本の第一次南極越冬隊長を務められたことであり、そして一九八〇年には日本山岳会のチョモランマ登山隊の総隊長をされたのだ。また西堀先生のご援助を得た最も有名な者が故植村直己氏である。そのように、単に京都大学学士山岳会という枠を超えて広く日本全体のことを考えていられたので、日本山岳会の会長を務められたのだ。私は、西堀先生のご信任を得られた者のひとりとして、先生が日本ネパール協会の会長をされていた時、理事として同協会の社団法人化の仕事をお手伝いした。(日本ネパール協会会報、No.108参照) また一九七〇年には、ネパールのビレンドラ前国王が皇太子時代に結婚式が行われた際、日本からは常陸宮ご夫妻が主賓として行かれたのだが、私は日本山岳会の国際担当の理事をしていたので西堀会長のお供としてカトマンズに行かせていただいた。その際に先生は奥様をお連れになり、私はネパールで三年間一緒に暮らした妻と、ネパール生まれの日本人第一号である娘がまだ小学生だったのを伴った。西堀先生ご夫妻とはネパールのあとカシミールを旅行したりし、実の親子のごとくにしていただいた。私は「ネパールの歴史と社会」の調査研究(外務省の特別研究員として)をしたあと海外石油開発関係の仕事に転じたのだが、石油開発の現地勤務であったインドネシア、バリックパパンに一年いて、そこから帰国後のことだった。



1970年、カカニの丘にて
西堀先生御夫妻

西堀先生ご夫妻と共に総勢五名の一行は当然カカニの丘に行った。そこには大型の望遠鏡が固定されていて、西堀先生はその望遠鏡でマナスルを長いこと眺めていられた。それは今から四〇年近く以前のことで、まるで昨日のように思われる。

この西堀先生の記念碑に皆様もネパールに行かれた折には是非訪問されることを望みます。なぜならば、そこには先生のご遺言に従いご遺族が持参された先生のご遺灰も埋められてあるのです。

後記・本稿の事実関係に間違いがないように西堀家に問い合わせをしたところ、西堀先生のご三男の西堀峯夫様からご丁寧なお手紙をいただいたことを御礼申し上げます。

なお、石碑の文面は英文で、これは和訳せずにそのままの形でここに再録させていただきます。

神原 達氏紹介、早稲田大学第一文学部史学科東洋史専攻卒、同大学探検部創始者の一人、日本山岳会永年会員、日本ネパール協会評議員、前副会長。

山口トボトボどこへ行く

廣瀬幸治

山口の訃報を聞いたとき、思わず口に出たのが、三高山岳部にあった以下の歌である。

山口トボトボどこへ行く

しよぼしよぼ雨降る峠みち

磁石をかかえて泣いている

磁石のないとき誰とゆく

トボトボしよぼしよぼただひとり

・・・・と泣いている

一九四八年にわたしが三高に入学してすぐに山岳部に入部したとき、山口はすでに卒業して浪人中で、アルバイトで中学校の先生をしていた。われわれがルームとよんでいた山岳部の部室は独立した建物で、南グラウンドの北側にあつて、西側の壁に本棚があり、和洋とりまぜ、かなりの蔵書があつた。これは後に京大図書館の登山探検

まですぎた。

山口とはその頃から、北山にはじまり、比良、鈴鹿など藪山をよく歩いた。快晴の霊仙山頂で白山から御岳、北アルプスの白く輝く稜線にみとれたときも山口といっしょであつた。どういふわけが彼との山行では晴天が多く、雨に降られた記憶がすくない。つまりわたしには、しよぼしよぼ雨降る峠みち、というたぐいの記憶

があまれない。学制改革によつて消えてしまふ三高山岳部の最後をかざる山行として、積雪期の立山東面という案があつて、夏に偵察に行つたこともあつたが、実現しなかつた。当時の実力では無理だつたとおも



山口克氏略歴

| | |
|------------|----------------------------|
| 1926年3月5日、 | 松浦家の4男として生まれる |
| 1948年3月 | 第三高等学校理科卒業 |
| 1949年冬 | 蔵平から白馬乗鞍を経て白馬 |
| 1951年冬 | 知床 硫黄岳 |
| 1952年3月 | 京都大学工学部燃料化学科卒業 |
| 1957年6月 | 大阪市立大学理工学部助手 |
| 1958年夏 | チョゴリザ登山隊員、カペリーピーク登頂 |
| 1962年7月 | 京都府立大学農学部助教授 |
| 1970年5月 | 同 教授 |
| 1985年 | 中国(新疆、ナムナニ登頂祝賀団) |
| 1989年3月 | 同退職 名誉教授 |
| 1991年 | パキスタン(ベシヤワール、ティリチミール登山隊同行) |
| 2008年11月8日 | 腸閉塞のため永眠 |
| 同年 | 瑞宝章叙勲従四位を贈られる |

う。そして結果

的には一九四九年二月二八日に山口とふたりに登つた白馬岳が三高最後の山行となつた。ただし、このとき三高山岳部は存在していたが、山口は旧制の、そしてわたしは新制の京大一回生で、わたしにとってはじめての本格的な冬山であつた。

山口の訃報をきいたとき、わたしはすぐに押し入れの箱のなかにつまつた地図のなかから五万分の一の白馬岳を探しだした。すつかり変色していて、そのうえかなりいたんでいる。それには大糸線の南小谷駅にはじまり、蔵平の部落を経て、山の神、天狗原、白馬乗鞍、小蓮華をこえて白馬岳山頂まで赤線がはいつている。

一月二七日に蔵平の民宿で、むかしから三高山岳部がスキー合宿でお世話になつていた宮島さん方を出発、近藤良夫、梅田敏郎両OBにサポートしてもらつて山の神の三角点の近くで幕営、翌日は曇天ながら風もなく、天狗原から白馬乗鞍をこえ、途中でスキーをデポ、おおく張り出した雪庇を気にしながら、ひたすら稜線をたどり、無事登頂することができた。いまふりかえてみるとこれはいかにも山口らしく、先ほどの三高山岳部にあつた歌のとおりトボトボ登つた白馬岳であつた。

もうひとつ記憶に残るのは、多数の新人を迎えた一九五〇年夏の剣沢合宿での山口の存在感である。これに参加したものは、夜の打合せのときのサブリーダー山口の、「チョットイッテオクガ、」ではじまる発言を記憶しているだろう。わたしはいつもとちがう彼の

演技にあきれていたのであるが、平井や松田をはじめこのときの新人たちはどううけとめていたのだろうか。それはともかく、この合宿は戦後の京大山岳部の出発点であったし、山口はそれを意識してせいっぱいの努力をしていたことはたしかであり、彼の誠実さの彼なりの表現であつたにちがいない。

わたしは一九五四年に就職して京都をはなれたあとの状況については、ほとんど何も知らない。山口ともめつたに会うこともなかった。彼が弱つてるときいてお見舞いに行つ

図書紹介

伊藤一著

「われら北極観測隊」(出窓社、九九年)

「レナ川―白夜航路四〇〇〇キロを行く」

(北海道新聞社、〇一年)

「BAMに乗ろう―ロシア的鉄道旅行術」

(どん出版会、〇八年)

平井一正

かつて冒険家植村直己が一九七四年、グリーンランドを北上し、カナダ領北極圏を横断し、アラスカに入つてベーリング海峡に至る、一万二千キロの単独大ぞり冒険旅行をしたときのことを書いた本に、次の記述がある。

「四月六日、カナダ領に入る。ハーシエル岬の手前、近づいてみると驚いた。数人の白人にまじつて日本人がいる。こんな雪と氷に覆

たのはつい最近のことである。いかにもシブトク長生きしそうな彼がなくなつたことに、わたしは信じがたい思いであり、彼とともに登つた山のことがつぎつぎと思ひだされる。いまはただご冥福をお祈りするしかない。

編集者より

山口 克氏の追悼集が有志により刊行されます。この本につきましては次号にて詳しくご案内いたします。

わたした地の果てで、人に逢うばかりか、日本人に逢おうとは思ひもよらなかつた。……」(植村直己・北極圏一万二千キロ、文芸春秋社、七六年)

この日本人がここで紹介する伊藤一さんである。A A C K会員で六五年山岳部入部、あだ名はドン、同期の同姓の伊藤と区別するためにドンガバチョの前半をとつたあだ名である。工学部土木の出身であるが、専門分野は多彩で、極地の環境問題にとりくんでいる、国際的に活躍している研究者である。多くの著書があるが、ここではそのうちの北極圏や辺境ロシアに関する上記の三冊について紹介しよう。

「われら北極観測隊」 七三年から七六年までカナダ領北極で海水の調査を行ったときの話である。このとき著者はスイスETH(連邦工科大学)に留学していて、教授のプロジェクト

クトに参加し、調査隊の一員として、気象観測と海水の運動を観測した。植村直己に逢つたのもこのときである。越冬者四人内ひとり女性の子人数での一年以上の生活を、さまざまなエピソードを交え、フランクリン隊など北極探検の歴史などを挿入し、面白く書いている。白人の中に日本人がひとりいる場合、どうしても圧倒されがちであるが、堂々と渡り合い友情を築いていく過程が興味ある。白クマ、ブリザード、落水、様々な危機があるが、悲壮感なしにユーモラスに乗り切っていく。筆者は第一次南極観測隊にも参加し、A A C Kには珍しい南北両極地に足跡を残している。タフという表現がぴったりとする筆者の面目が躍如とする。

「レナ川」 北極海に注ぐ河川の八割がユーラシア大陸からであり、とくにレナ川、エニセイ川、オビ川の三大河川が顕著である。北極海に流れ込んだ水が、太平洋や大西洋に流れ出し、地球全体の温度分布に影響を与え、環境変化に影響する。その意味でこれらの河川の調査は重要な調査対象になる。

本書は一九九九年に筆者がレナ川河口からイルクーツクまで約四〇〇〇キロを調査したときの話である。ただし内容は三二日間の旅の物語で、調査結果を述べたものではない。しかし不便なロシアの僻地における旅行の困難さを知る上で大いに参考になる。

経験した人は知っているとと思うが、ロシアは不便な国であり、融通のきかない国である。モスクワから河口のまちチクシまで、航空会

社をたずねてチケットを予約することも簡単ではないが、チクシから船に乗り込むだけでもハラハラするような物語が展開する。予定していた船は着岸できず引き返し、別の船はどの港からいつ出航するか、新聞もなく、すべて口こみときくだけで、途方にくれる。まして乗船は船長と直に交渉となると、気の遠くなるような困難さである。このような困難を克服し、結局著者は九人乗りの小さな船をつかまえて川を遡る。同行者はペテルブルグで事前調査したときの教授の代理で女性研究員である。さらに船をのりかえ、のりかえ、最後は目的地まで到達するのであるが、この間、船の中の様々な人間模様や食事、設備などを面白く記述してある。普通は単調な船旅だが、よくこれだけ興味ある話題があると思うほど著者の広範な知識を取り交えて二七〇頁の本にまとめている。因みに著者は、ロシア語は旅をしながら身につけたというが、この才能も辺境を旅する者の必須条件であろう。

「B A Mに乘ろう」 B A Mとはバイカル・アムール本線の略で、シベリア横断鉄道の途中から分岐する枝線であり、一九八四年に開通した辺鄙な路線である。全長四三〇〇キロ、シベリア横断鉄道の東半分の北側を本線に並行して走っている。戦後ソ連に抑留された日本人がその建設に使われたという。

著者はB A Mがスタノポイ山脈（大興安嶺山脈のこと）の中腹を巻くように走っていることを利用して、この山脈から南北に別れて流れるレナ川とアムール川の流域の比較研究を国際

研究プロジェクトとして立案するために、ひとりB A Mに乗り、途中下車しながらその調査を行った。ただ本書は調査内容にはふれず、一般に開放されてはいるものの、その乗り方が分からない鉄道愛好者にB A Mの乗り方、沿線の紹介をしようとするものである。

たしかに親切な案内書である。盗難予防、健康や病氣、切符の買い方、時刻表など至れり尽くせりである。途中下車した街の様子も面白いが、コンパートメントでの相客との対応や食堂車、食事、飲酒、トイレなど長距離旅行のノウハウが面白い。またロシア人の生活、子供のしつけなども随所にエピソードとして挿入しており、先の「レナ川」と同様、単調に思える列車の旅であるが、いきいきとして書かれていて、読者に退屈感を与えない。

事務局報告

【理事会決議録】

一、日時 平成二一（二〇〇九）年三月八日
（日）午後二時～午後五時
二、場所 京都市左京区田中関田町
京大会館一〇三室

三、出席理事 上田豊、前田栄三、松林公蔵、

福寫義宏、前田司、横山宏太郎、幸島司郎、牛田一成、永田龍、吹田啓一郎、山田和人、竹田晋也、以上一二名

委任状によるもの 田中昌二郎、中川潔、人見五郎、高尾文雄、小林尚礼、

筆者平井は、笹ヶ峰通信で紹介された「B A Mに……」を著者から贈呈してもらい、その面白さにひかれて他の二冊も購入して読んだ。期待に違わず、この三冊から、大自然の中でも、見知らぬ辺境でも、著者の知恵と知識を使い、多くの困難を見事に乗り切っていくバイタリティと精神力に感動を覚えた。これらは、山岳部の生活や、著者の長年のヨーロッパでの生活が大きく影響していると思われるが、読む者に勇気を与えてくれる好著である。これら三冊の本から示唆されることは多いが、自らの得難い経験を、本として出版することの大切さをあらためて感じる。

多彩なA A C K会員の中でも、非常にユニークな活動をしているこの伊藤会員のことを、会員にもっと知ってほしいという願いもこめて、この三冊を紹介する。

欠席理事 松沢哲郎、以上五名
出席監事 西山孝、伊藤宏範、以上二名

四、議事の経過および結果

会長上田豊が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案

平成二一（二〇〇九）年度事業計画について
理事吹田啓一郎によって作成された平成

二一（二〇〇九）年度事業計画が説明された。
第四事業第三項でヒマラヤ学誌一〇号の会員配布を実施すること、また第四事業第一項で隔年発行の会員名簿を平成二一年度は発行することを確認し、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案

平成二一（二〇〇九）年度収支予算について
理事竹田晋也によって作成された平成二一（二〇〇九）年度収支予算が説明された。特に書類保管用借室契約を平成二〇（二〇〇八）年度で解約して賃借料の支払いがなくなること、事務の外部委託を増やすため委託費を増額すること、中国雲南省における梅里雪山隊捜索関連には必要が生じた場合には特別会計遠征基金から支払調査助成金により支出することについて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 新入会員について

担当者より下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

遠藤 州

第四号議案 海外登山・探検助成制度の運用規程改定と審査委員の選任について

担当者によって作成された海外登山・探検助成制度の運用規程の改定が説明され、特に助成額の標準額を二〇万円、下限を一〇万円とすること、事故時の免責条項を追加すること、申請書類の記載事項を見直すことなどに

ついて逐一審議の結果、満場一致で下記の運用規程と申し合わせ事項を承認した。また、二〇〇九年からの審査委員を選任した。

海外登山・探検助成制度 運用規程

（二〇〇五年五月一五日制定、二〇〇九年三月八日改定）

第一条 海外登山・探検助成制度（以下、助成と称す）は、バイオニア的ないしオリジナリティのある海外登山や探検的活動の助成を目的とする。

第二条 助成の対象は本会会員が主催する計画とし、申請者は本会会員に限る。助成に際しては審査委員会の審議に基づき、理事会が決定する。

第三条 審査委員は理事会で選出する。委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

第四条 助成金額は一件一〇万円を下限、年間三〇万円を上限とし、通常は一件二〇万円とする。ただし理事会が認めた場合はこの限りでない。

第五条 助成を行うにあたり、助成対象の隊から、隊の行動ならびに事故について本会は一切責任を負わない旨の免責を得るものとする。

・申し合わせ事項

一 助成の決定は原則として年一回三月に行い、予算に余裕があれば九月にも行う。

二 助成を申請しようとする者は会長宛に文書により申請し、事後三ヶ月以内に報告書を提出しなければならない。報告書はA A C Kニューズレターならびにホームページに掲載

する。

三 一計画につき一申請だけ受け付ける。

四 助成受領時に以下の文書にて免責を得る。

助成をいただいた計画に関しては、その安全性を含め私共が全ての責任を持って立案及び決定を行ったものであり、隊の行動はもとより、万一事故等があった場合でも、貴会に對し理由の如何を問わず、何らの損害賠償その他の請求をいたしません。

・申請方法

次の内容を記載した申請書を作成し、会長または事務局へ提出する。PDF等による電子メールも可とする。申請書はA4用紙五枚程度で、書式は自由とし、次の事項（申請時の予定）を記載する。

（一）隊または計画の名称

（二）申請会員名と連絡先、電子メール等

（三）隊の構成（氏名、年齢、所属山岳会）… A A C K会員外の参加も認める

（四）対象国・山域・地域

（五）概略のルートと日程

（六）予算計画

（七）隊の特徴などのアピール

（計画の目的・意義と対象地域・活動内容、準備状況、隊員構成の関係など）

（八）事故発生時の連絡体制

（九）助成金の振込先（銀行名、名義、口座番号等）

・審査委員会委員

審査委員長

平井一正、審査委員

阪本公一、松林公蔵、高尾文雄、小林尚礼

第五号議案

海外登山・探検助成制度の採択について

安田隆彦会員から「二〇〇九年崑崙隊」計画の申請があり、運用規程に従って審査委員会で審議し、平井一正審査委員長から基本的に助成を認めるとの報告書が提出されたことが紹介され、満場一致でこれを承認した。なお、審査委員会からの報告書に付された計画日程などに関する再検討の意見を申請者に伝えることを併せて決定した。

第六号議案

特別会計遠征基金の調査助成金に対して、副会長前田栄三より雲南懇話会の趣旨と活動計画が説明され、二〇〇九年度から二〇一一年度までの懇話会活動支援のため三〇〇万円の助成が申請され、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

平成二一（二〇〇九）年三月八日

社団法人京都大学学士山岳会理事会

五月十七日に開催された理事会・総会の決議録は次号でご報告します。

会員動向

訃報 山口寿雄会員

新入会員

遠藤 州（えんどう しゅう）

東大・理 50

自宅 〒115-0052

東京都北区赤羽北 3-26-5-1511

電話 03-5924-2206

e-mail: endo@mb3.suisui.ne.jp

勤務先 日本IBM（株）

〒135-8511 東京都江東区豊洲 5-6-52

電話 03-6220-5704

会員異動

安仁屋政武会員 勤務先削除

遠藤克昭会員

勤務先 四条畷学園大学、藍野大学

神山義明会員

自宅 〒180-0023

武蔵野市境南町 3-19-12

電話 0422-34-2528

幸島司郎会員

自宅 〒606-0831

京都市左京区下鴨北園町 51-2

電話 090-2177-0597

合田真会員

自宅 〒815-0083

福岡市南区高宮 4-3-33

高宮シティハウス 201

電話 080-5410-6349

山本克彦会員

自宅 〒745-0005

山口県周南市児玉町 二丁目 7-1

Tel&Fax 0834-31-2568

編集後記

五月の発行予定が一ヶ月遅れとなりましたことお詫び致します。執筆者が脳内出血で急遽入院、手術されました。幸い回復は早く、原稿を病院からメールしていただきました。この出血の原因は今冬スキーで頭を強打されたときに脳内で徐々に出血が起っていたようです。皆様もどうか気をつけて下さい。

次号は八月発行の予定です。原稿締切は六
月末日です。（前田 司）

編集委員

前田 司

発行日 二〇〇九年五月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒六二一八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

京都市北区小山西花池町一八八

製作 (株) 土倉事務所